

在特会の論理(21)

——インターナショナルスクールで学んだU氏の場合——

樋口直人(徳島大学総合科学部)¹

1. 経緯

本稿は、2011年12月12日に在日特権を許さない市民の会(在特会)でも活動していたU氏(20代男性)に対して行った聞き取り記録を、意味が伝わりやすいように適宜並べ替えて再構成したものである²。U氏は、中学高校とインターナショナルスクールに通い、高校時代から排外主義運動に参加してきた。以下では、U氏の言葉をそのまま用いて活動家としての経歴をたどっていきたい。

2. 政治に対する関心

うーん、小さい頃…そうですね、まあ中学高校くらいだと思います。中学入ってくらいからですかね。僕はどちらかというと、歴史に興味があって、特に近代史、近現代史。その辺がすごい好きで、本読んだりとか——まあ知れてますけど——テレビ見たりとかしていて。そこがきっかけじゃなかったかと思いますね。

母親はノンポリでしたし。父親も——うち離婚してるんですけど——地元の議員さんを応援している、それくらいはやってるみたいですね。(家で政治の話が出ることは)それはなかったです。せいぜいNHKの

¹ 〒770-8502 徳島市南常三島町1-1、higuchinaoto@yahoo.co.jp。

² これまでのまとめとして、樋口(2012a, 2012b, 2012c, 2012d, 2012e, 2012f, 2012g, 2012h, 2012i, 2013a, 2013b)を参照。これらはまとめて、樋口(2014)の資料編として位置づけられる。本稿も含む一連のまとめでは、聞き取りの中で発せられた差別的な言葉や見方をそのまま掲載している。資料としての意味を損ねないゆえのことであるが、それが苦渋の選択であることはご理解いただきたい。

夜のニュースみるくらいですか。それくらいで、そういう話もせず。まあ、普通の家ですね。

一番やっぱ大きかったのは、ネットですかね。これはまあ、在特関係の人だいたいみんな共通していると思うんですけど、若い人で。ネットで、そういうのがある程度家庭に普及した時期じゃないですか。そういうので政治関係の情報を載るようになって。左右両方の人が発信していたわけです。その時たまたま、自分にしっくりするものがそこにあったということで。それは興味を引きつけたというか、そういう感じですね。

(インターネットを使い出したのは) 小学校ぐらいから。ちょうど、ゆとり教育の一番最初の頃なんです。結構、総合学習とかあって、パソコン活用したりとかそういうことがあったんです。それで調べ物してまとめて。それがきっかけでうちのパソコンを買って、自分でやるようになって、そんな感じですね。

(選挙権を持ったのは) 今年の統一選が初めて。知り合いの議員とかいますよね。まあ活動のつながりですから。そういうとこに——まあ自民党ですけどね。この間の統一(地方選)の時に知り合いの人がいて、その人のところに応援に行ったり、それくらいはしてました。それがベターかな、ベストじゃないけど近いオプションでいうたら、それでいいのかなみたいな。その人に入れたからといって、自分はいれられないですけど、地元で入れたとして、自分達の主張がまず 100%通ることはいらないですか。でもゼロよりはいいんじゃないかなと。

(投票先は自民党か) そうですね。だって、たち日(たちあがれ日本)なんてずっと世論調査 0.1 (%) じゃないですか。まず無理ですよ。それは他の人たちとは違う部分で。あの界限の人も、選挙のときにどうするといったら、結構たち日に入れたという人も。おつるさん(中曾千鶴子)もたち日の人じゃないですか、選挙に出たりして。でもそういうことをやっても、実際に入れたってまず死票になるんですよ、やっぱ。それよりは、うまいこと生かしたほうがいいんじゃないかと思います。流れ

を作るという部分ではね。そこは妥協しなきゃ。

3. 外国人との接点

(外国人との接点は) ありました。身近どころか、多分、他の活動家の方よりも身近だと思います。というのは、自分、中学高校はインターナショナルスクールってあるじゃないですか、ああいうところに行っていたんです。クラスメートに韓国人いましたし、中国人1人いましたし。そういう面白い環境でした。僕もちょっとしゃべり下手なんで、人見知り若干するんですけど、でも打ち解けたら・・・。

(韓国人は) 本国からきて。本当に在日とは違いますし。お父さんが例えばいろんな会社の派遣で日本に駐在していると、そういう人の子供もが通うとか、そういうケースが多かったです。よく会社なんかも——リーマンショックの前ですけど——会社が学費出してくれる、そういう話も結構ありました。

(学校に) 行って、そこの先生としゃべって、簡単な会話ですよ。その時そんなにわからないじゃないですか、半分くらいしか答えられなくて、それでも入れた。正直、入試という入試は——今はうるさいらしいですけどね、自分が入った時はそんなにうるさくなくて。まあ、学費払えばいいだろうみたいな、そんな感じです。(英語での授業は) すごいしんどかったですけどね、最初は。最初特訓して、特訓クラスみたいなのに入れられて、そこで覚えてから普通のクラスに入ってくみたいな。最近ちょっとしゃべってないんで落ちるでしょうけど、でもなんとか。

(活動への影響は) あったと思いますよ。やっぱ、自分を知ったっていうか。だから例えば、こういう運動に入る人がどうやって自分のアイデンティティを形成するかって、僕あまりわからないんですけど。そういう意味で、普通の人との成り立ちと比較にはなりにくいと思うんですけど。いろんな視覚的にわかるんですよ、あいつターバン巻いているからインド人だな。あいつ韓国人の顔だな、とかあるじゃないですか。そ

ういうと自分はあれだな、自分は日本人だなんて。母国語は日本語。そこから自分を知るということですね。だったら日本っていうのは…そういう感じですかね。

（そこで受ける教育は）アメリカ視点のアメリカの授業ですよ。1回あの、日本の歴史を——選択だったんですけど——それ取って、大分ちょっと頭にきましたね。まあ、アメリカ人から見たらこうなんだろうなって。そういうこともありました。逆にそれで（日本の）中高の歴史教育がどうなのか、実際には知らないんですけど、話はできないんですけど。

（大学入試は）いわゆる学校教育法的一条校ってあるじゃないですか、あれではないので——最近多いんですけど——私学で独自の入学の試験を設けている、そういうのを受けて。AOとか自己推薦とか、そういう選択肢しかなくて、受けて。それがたまたま英語の資格が使えるところだったんですね。それで受けて入りました。

（日本語は）家庭でもしゃべってましたし、テレビでも見てましたし。友達ともある程度日本語でしゃべったり。一応（日本語の）授業はあって、新聞を使ったりして授業はありました。まあただ、普通の一般の人に比べたら、ちょっと漢字書けないとか、今でも時々バイトとかで——コンビニなんですけど——領収書で宛名って言われたときに、あの字なんだっけ…見たらわかるんだけど、それは結構あります。それはちょっと情けないというか。でも全然読む分には問題ないです。（漢字は）6年間普段やってないじゃないですか、それもあります。

4. 活動に連なるきっかけ

特に一番手取り早いといったら、韓国の併合問題。その後の問題というか、その辺の関係がちょっと気になったこと、それがきっかけだったと思いますけどね。（調べたら）そういう（修正主義的な）主張があって、それが気になって。そういうのを何年かやっていて、その頃に在特会できたんですよ、確か。ネットをすごい利用してたんで、あそこは。

それがきっかけでした。

(歴史から在特会に流れる理由) 早い話が、一番興味があったのが日本の近現代、いってみれば1910年以降となりますね。韓国併合して、台湾併合して、満州国作って、そういう経緯があるじゃないですか。大分、僕らはテレビを見て聞いていたら、日本はあまりいいことしなかった。でもそれも、いろんな側面があると思うんですけど、じゃあ実際どうなのかなという話をネットで見聞きして、本で読んで。必ずしもそうじゃなさそうだな、という。そこからどちらかという社会——日本と韓国との関係、日本と中国との関係という社会問題にシフトしていった。そういう感じですかね。それから外国人問題。そんな感じですか。

(在特会に行き当たった経緯は) それはやっぱ、あまり覚えてないですね。結局ネットサーフィンしていたら、気づいたらぜんぜん違うところ行ってますでしょう。本当にあんな感じで、友達からサイト教えてもらって、それから検索の検索の検索のという感じで、多分行き着いたんじゃないんですか。たまたまそいつネットが好きで、いろいろ見ている、それでたまたま見つけてきたんですよ。本人は多分、今彼はそんな(排外主義的)でもないし、活動しているわけでもないです。それでたまたま本当に——たまたまですね。だからそういう意味ではある程度ネットの社会にそういうのがある程度、よく出てたというか。そんな感じですね。

5. 参加へ

(活動を始めたのは) 実質3年くらい前ですかね。高校2年くらいだと思います。ネットで在特会が出てきて、それなりにある程度自分も含めて注目が集まっています。(その頃には) ネットで見る程度ですが、一応(会員に)なりました。(会員番号は) 皇紀と似ていて、2667とかそんななんです。できたのが2007年の暮れだったから、それくらいですね。で、それで桜井誠が来るという話があったんですけど。で、一回あ

の人の話を——結構あの人しゃべりはうまいで——どんなもんかなと思って行きました。多分在特（会）かなんかの。そこで講演会の情報が載っていたと思うんですよ。（ミクシィと在特会サイトの）多分両方見ました。ミクシィだったら、同じ興味を持っている人の講演も聞きます。そういうのもありますし、いろいろ見ましたね。

（参加者は）40人くらいですかね。どこかのレストラン借りて。桜井さんそんなに来ないじゃないですか。普通に桜井さんがしゃべって——あの人しゃべるじゃないですか——それは聞き慣れていたし。問題なかったですね。それ自体は納得できたかなって。（テーマは）外国人参政権だったんじゃないんですかね。多分そうだったと思います。最初、桜井が一番テーマにしたのはそこだったと思うんで、それですかね。あの人がダメダメいうじゃないですか、それを聞いてそうだなと思って、反対運動してるんですけどね。

その時、（講演）会をやった人に会って、だから講演聞いてその後街宣があって、それくらいだったと思うんですけどね。その時たまたまミクシィで、お会いしましょうという話になって。行きますって書いたら、私も行きますよと。たまたまその人が声をかけてくれて、お茶に行ったんです。それで人と知り合って、自分はなんだかんだと活動に入っていたというか。

正直、自分もそうなるとは思ってなかった部分はもちろんありますけど、やっぱりそういうのを見るうちに、今現状がおかしいと、現状を変えたいけどどうしたらいいんだろう、みたいな。そういう中で、桜井誠とかいろんな人が街宣やる、講演会やる。そういうのを見ているうちに、そういう方法があるんだなと思って。それで変わるのなら、それが最終的に回りまわって何かになるのだったら、やったほうがいいんじゃないかなと。そういう感じです。

（周囲で活動したことがある人は）まずいないでしょうね。むちゃくちゃマイノリティですよ。（活動では）面白い友達も普通にいますし、結

構そうですけど、自分が興味を持ったことに関してはどこまでいきたいとか。自分がある程度いってみて、わかるところまで知りたいとか。それは好奇心、興味ですかね、やっぱり。それが強かったから。

(同年代の人は) 1人いて、今もう彼はあまりやってないですけど。ちょうど僕が入ったころはまずいなかったです。(珍しがられたりも) 大分ありましたね。だから、よくお前来たな、みたいなのは結構言われました。自分は周囲にいつも古臭いって言われるんですよ。お前、一回りごまかしてるとか言われるんですよ。まあ別にそれもあるんですけど。小さい頃から周りに大人が多くて、それでそういう意味ではぜんぜん抵抗はなかったです。元々(育った環境)が影響していると思うんですよ。

同年代だったら話も合うでしょうけど、自分が何をしたいのかですよ。自分はそれほど強くは望んでないことって、やる気はそんなに起きないんです。やる気の問題ですからね。そういうところはすごい完結してるじゃないですか、今の運動体というのは。そういう良さ(やる気が起きる要素)があるんでしょうね。だからよく本当にこういう活動に入ってきたなど。同世代って、すごい少ないじゃないですか。で、そんな中でよく入ってきてる。同世代の中ではすごいマイノリティじゃないですか。周りはノンポリばかりで、そういうことに興味を示さないで。だから、そういう意味で連携もしてきたし。

(親には) その時は言わなかったかな。いちいち言うことでもないかな。講演会があって、しばらくしてから何かの話でしましたけどね。(親は) ほどほどにやれよ、みたいな感じですよ。放任主義までいかないんですけど、そんなにうるさく言わないほうだったから、その意味ではやりやすかったですね。友達でも結構うるさい親がいて、大分ごまかすのに苦労してましたけど。そういうことを考えたら、大分やりやすかったです。すごい敷居が低かったとか。ネットというツールがあって、普通の講演会があると。そういうだから、ステップがあったんです。逆に

考えたら、左の運動とかあるじゃないですか、あんなのどうやって入っていくんだろうと、いつも疑問に。それなりにあるんでしょうけど。ただ自分にとっては、こっちの運動が敷居が低かったんですよね。

あの人（桜井）自身はそんなに来ないんで、実際、なんだかんだで支部のところに行くようになって。北朝鮮がミサイル打ったときかな、テロ支援国家指定を解除したとあって、「アメリカ大使館に行くから」ってあって、「ああそうですか」ってなんだかんだと行って。そんなことの繰り返しでした。こんなやるよとあって、行くみたいな。最初は講演、桜井誠とあったのが5月で、その次7月、本当に飛び飛びで。（受験への支障は）まったくなかったです。

（今は）普段の生活は学校行ったりとかバイトしたりで。せいぜい、活動だって土日くらいじゃないですか。だからぜんぜん問題ないです。自分のできる範囲でやってますよね。だって続かないでしょう。そのくらいのペースでやってたんで、できたかなと。前に荒巻さんが捕まるまえに3日に1回くらいやっておって、この人は何でこんなに暇なんだ。荒巻さん仕事夜だからいいんですけど、こんなだったら絶対に続かない。またみんな来てるんですよ、平日の昼間から。暇だなーと思って、いつも見てたんですけど。だから続かないです。結構入れ替わりも激しいです。あそこは。

6. チーム関西について

荒巻さんとか、あの人（西村斉）がやるようになったじゃないですか。荒巻さんが切り込み隊長、西村斉さんが参謀みたいに、後ろである程度構えて、彼なりに作戦を考えて。（主要人物は）彼ら2人です。最初は僕も行ったりしていたんですけど、なんか違うなって思って。違うのはいいんですけど、何となく荒巻さんらの始めた、京都の朝鮮学校の…。これはちょっと違うんじゃないかと思いましたね。

やっぱりね、なんていうかすごい経験がない、あの人ら経験がないわ

けですよ。荒巻さんも後から入った方なんで、すごい燃え滾っていて——すごい燃え滾ってましたね。で、保守運動関係で自分達でやるようになって。その燃え滾っている部分がすごい前へ前へ出ているんですよ。だからすごい、運動っているいろいろあると思うんですけど、それじゃあ絶対失敗すると思うし、うまくいかないことあると思うし。だから理性的な部分——理性的な部分がないといたらあれですけど——運動論というか、普通は何かを考えてやるじゃないですか。先に行動をやって、それから後で結果を総括するみたいな。ある程度グランドデザインが大事なわけじゃないですか、あるはずなんでしょうけど、曖昧で。だからまず行動ありきで。そこは、ああ、これはまあまあ、曖昧な気持ちで見て。なんだかんだで、結局、最終的なところが見えてこなくて。何したいんだろうなと思って、それはありましたね。そういう気持ち。ちょっとなんだろうなという気持ちが。

(京都の朝鮮学校の時には) 僕は行ってないです。なんか公園清掃しますみたいな話だけ聞いて、ふーんと思って。多分本人たちも、そんなには思ってたんじゃないでしょうね。結局学校側で、後ろについてくる総連とか弁護士、法曹界がすごい騒ぎ出したのが大きかったですね。

(彼らが捕まった時には) 荒巻さんよく知ってたし、何度も一緒にやってたし。仲間は仲間です。たまたま今一緒にやってないだけで。たまたまその時に、だからまあ若干応援したりはしました。中谷さんは、京都の拘置所に入ってたんですよ、迎えに行ったりとか、それくらいはしてましたね。あの時出て来るのすごい遅くて、普通出てくる時間ってわからないじゃないですか。話ではその日の午前中とかいう話で、西村修平さんも来られていて、ずっと待ってたんですけど、出てこなくて。なんかすごい警察が嫌がらせしたらしくて、出たくなくて。何度も準抗告出したりして。出てきたのが11時くらいです。夜の。ずっと車を止めて。ローソン行ったり暇つぶしして、話したりしてとにかく暇つぶしして。

(西村修平は) その前からよく来てたんですよ。だから一緒に街宣やったりとかしましたね。僕もなんだかんだ東京行くようになって、向こうでも御一緒したりとか。荒巻さんの事件の時に、いろいろお互いにやった関係で、大分、一緒にやるようになりました。すごい知っている方ですし。運動論的にもすごいですし、社会全般そうだし。その意味である方は安心できる。ちょっと時々ぶれることがあるんですけど、根幹はすごいしっかりしている。

引っぱり人があれだけイケイケでやってたじゃないですか。それに共感した人が多かったと思うんです。お祭りのな部分で。それでそういう人が集まったんじゃないんですか。あれを運動というかどうかは別の話ですけど、そういう方針でやってそういう人が集まってきた、それはあるでしょうね、実際。現に荒巻さんがやるようになって、僕も最初行ってたじゃないですか、いきなり知らない人がばーっと増えて、何やこいつはという風になって、いつの間にか主力になってた。それで僕は少し行きにくくなったんですよ。荒巻さんは初対面の人にも「あーどうもどうも」って軽いといったらあれですけど、気さくな感じ。いろいろな人ととりあえず仲良くなって。で、いきなり知らない人ばかりになって、ちょっとやりにくかったですね。

(それまでとは) ぜんぜん違いますよね。そんなにああいう経験の激しいのをやったりするときは、必ずしもいたわけじゃないんですけど。そういう人も加わって、色がどんどんそうだったというのはありましたね。あの行動力はすごいです。あのモチベーションがわからない。違うんですよ。燃え滾っている。生活レベルを落としてでも運動してる、そういう人たちですから。経験がそれほどなくて、それが全部だと思ってるんでしょうね。運動の多面性をあまりに認識していないというか。まあ、今はさすがにねえ、ある程度は落ちついていると思いますけれども、あの頃はもう……。

3日に1回(の活動)なんて絶対に無理です。(川東了は) 失うもの

がないですから。奥さんいないし、実家暮らしですし。自営業で。だからできるんでしょうね。そういうこともいえる。そういう運動を主体的にやろうとしている人は、そういう人らばかりじゃないですか。荒卷さんにしても自営業だし。してもそんなに迷惑にはならない。普通に会社勤め・・・〇〇社長、会社やってるじゃないですか、ああいう人は言えない。あの4人の中で一番こたえたのは、多分中谷さんだったんでしょうね。一番だって、社会的な束縛が強いじゃないですか。荒卷さんは一人者だし、自営業。斉さんも奥さんと子どもいますけど自営業ですし。僕も中谷さんの支援したり、そういうのはやりました。そういう部分でやったんで。でもあそこは奥さんが強いですから、しっかりしてますんで、本当に。今はね、若干引いている部分もありますけど。それどころじゃない。

元々在特会はああではなかったんです。桜井誠もそれなりの自分のペースで、根っこの部分である程度にたよるものがあると思うんですけど。そこに荒卷さんたちが入ってきて、自分達の運動をやる、それが世間一般でいう在特になったって、そういう感じでしょうね。元々あの人はずい理論的な人じゃないですか、桜井さん。だからすごい理路整然としゃべるし、それにもとづいたそれなりの新しい保守運動なりにはやってきましたけどね。やっぱそれに行動的な色をつけたのは関西だと思います。元々あんなにパフォーマンスする——まあ若干あったんでしょうけど——あそこまではなかったです。そういう意味で影響されたんでしょうね。すごい影響されましたね。こうやるんだ、みたいな。関西の、そこまでのアグレッシブさがなかったでしょうけど、関西のあれが出てから意識している部分が。最近、どうも桜井さん、どうもその部分があるみたいで。運動の最終目的がみえないという部分に関しては、一緒だと思いますね。ちょうど荒卷さんが出てきて、やっぱその影響を受けてる感じがしますね。

7. 既成保守との関係

在特会なり新しい右の運動が生まれたじゃないですか。それまでの運動ってあったじゃないですか。右翼なり、いわゆる保守層というたら、そこが行き詰まっていた部分があって、本当に左みたいに長いものがありながらそこにそれを広げようというあれがなかったし。だから右(は)自己完結してたんです。右翼は右翼で一つの存在じゃないですか。もう完成された。それも、もちろんそれはそれじゃないですか。で、右の保守層もすごいマニアックで、広がり——広がりとうはしない。だからそこで行き詰まって、いろいろ社会が変わるじゃないですか。そういう中で必然的に新しい運動が生まれたんじゃないんですかね。そういう意味で、それはプラスもマイナスもあるんでしょし。必ずしも今の在特会なり、あれに 100%マイナスではないと思う。もちろんプラスの部分もいっぱいある。広がった、保守層の考えを広げるという意味ではプラスだと思うんですけど、やり方的には 100%ではない。マイナスもあるでしょうね。一般層には広がろうとしてるけど広がらない、みたいな——結果的には。だから何かを変えるという意味では必ずしも成功してない。

左の市民運動って最終的に票になるじゃないですか。ネットワークの中でですけど。だからそこに住民運動として 1 人議員作ったりとか、それは極端ですけどするじゃないですか。なんだかんだ辻元清美みたいな人も出てくるじゃないですか。地方議員って結構いますよね、共産党なり社会党なり。(右の市民運動は)そういうのをやらないじゃないですか。だから自民党は自民党だし、利権の人もありますし。必ずしも保守じゃない。結局そういうところに行き着かないから、例えば今の自治基本条例、あんなんでも止めようできない。結局その、自分達で議員を持っているわけではないから、とりあえず自分達に少し似通っている人たちに、自民党の議員団に頼み込んでやるとか。そこらへんの連携がうまくいってないですよ。だからそういうのを止められない。

日本会議って、神社関係者も多い。すごいだから、これまでの保守層なんです。もちろん何かあったときには動くでしょうけど。それまではまず動かない。それはどーんと構えてる程度なんで、それで変えられるかいうたら無理でしょうね、やっぱり。まあせいぜい年一回総会やって、時々講演会やって、それだけじゃないですか。その程度。それで社会を動かせるかいったらまず無理ですね。いったら悪いですけど、年寄りばかりじゃないですか。すごい何かを変えようというあれもないし。それは無理でしょうね。

何を保守というのかなんですよ。日本の文化だと思ってますし、ひいては皇室だと思えますけど、今の現状をどうするのか。例えば僕らからしたら外国人参政権が法案になろうとしている。今は自治基本条例が、もしかしたら人権擁護法案が出るかもしれない。そういうときに、構えとってはいかんのですよ。自分達はできないのに、成立しないのに行動しないと。自分たちが動かないと変わらないですから。その中で保守保守いっても、じゃあ何(を)保守するのか。自分たちが動いて守らねばならないものを守らなければならないんじゃないか。そうなんです。自分たちが動くという部分が、どうもこれまでの保守界には、あんまり——あったとしても——やっぱり欠けてたり。だからこそ、ああいうのが——新しい保守運動が生まれたんでしょうね。

8. 大学の環境

(周囲と政治の話は)まずしないでしょうね。だってそんなの興味を持つ人自体が少ないじゃないですか。ある程度はあるんでしょうけど、知れてますよね。うちの学部ってのは附属から上がってきてとかそういうのがあるんで、結構一番確か枠が広いんです。だからあまり興味ない人も入ってきているし、興味ある人もある程度入っている。でも興味を持つかっていったら、大学生なりというか、それくらいですよ。正直、大学入って物足りない部分は結構あります。それまでにいろいろやって

た分もあるから、逆に。まあ逆にみられましたら、同世代に近いのがないんです。ある程度の少ない種類の集団しかいないんですよ。多様性がないっていうか。その意味でちょっとつまらない部分はありますね。

(大学で保守系活動している人は)あまりいいですね。いますけど、ぜんぜん一緒にはやってないですね。日本会議系に近い学生組織みたいな。学生文化会議とかいう——それなりにはやってるみたいですが、接点はあまりないです。最初はコンタクトはあったんですけどね、なんだかんだであまりやらなかったし。やっぱ毛並が違う、(行動)するけども限られてる。でも最近、結構してますけどね。日本会議なんか、尖閣の漁船の問題あったじゃないですか、あれで結構やるようになったって。それまでほんまに何もなかったですけど。また結構大阪が熱心で、やってる方が。結構週イチくらいで署名やったりとか。

9. 日本文化への関心と排外主義

それ(皇室への関心)は歴史を学んで、そこから社会、それで自分がガイジンの学校に行ったりして、自分のアイデンティティを作るじゃないですか。アイデンティティを。で、日本で(アイデンティティになるのは)何なのかなと思ったら、皇室かな、みたいな。何となく。それは見聞きもあるでしょうけど、最終的にそうになりました。

(そう考えるようになったのは)5年くらい(前)じゃないですかね。学校で勉強したって教わらないじゃないですか。存在が空気になっているというところがありますね。残念ですけどね。それまで右の人は(皇紀)2600年という、それがどうかは別にして、実際に長く続いてきたものですよ。少なくとも天智天武から確立されているわけじゃないですか。政治の主体でありそうでない時期も含めて、1つの存在だったんですね。やっぱそういう意味では、これまで続いてきたものだから、貴重なものなんじゃないかな、自然にそう思ったんですよ。だってもし必要でなかったらそれもとっくに廃れてると思うし、でもそうじゃなかつ

たじゃないですか。で、その皇室の方々の存在だけじゃなくて、それに例えば行事をやったりとか。そこに人が周りがあって、そこに文化があって。それで発展してきたものだから、と思いますね。だからこそ重要性がある。単に日本という1つの国の統治者だったならば、それほどの存在ではなかったわけです。いってみればリンクしてると思うんです、日本の文化と。神道なりも。その意味で1つの集合体として。だから全部含めて日本の文化じゃないかと思いますね。

日本の文化伝統があって、それを守りたいという気持ちがあって。ああそうか、・・・(「外国人問題」とどう関連するか)・・・そうですね。やっぱりその、質問されて、何だろうなって自分で初めて思ったんですけど、何なのかな。例えば外国人参政権があるとして、仮に通るとするじゃないですか。それはやっぱりその、社会を動かしているわけじゃないですか、選挙で。そうなった時に、そういう中で日本のあり方も変えようと思ったら変えられるじゃないですか。もちろん可能性として。

で、よく言われるのは竹島ですとか、島根県で外国人参政権、松江、隠岐島でとるとしたら、そういういろいろな法律を通せるとして。やっぱりああいう場所は国防の場所だし。国防という観点からいえば、そういう意味で重要なんですよ。そういうところで、変えてはいけないところを変えさせたらいけないんじゃないかな、そういう感じですかね。

やっぱり、すごく近い国だから、そういう問題がありますし。現に併合問題で問題になっている、そこから来るんでしょうね。だから日本には移民がまず少ないですよ。そういう意味では問題にあまりならないんですけど、そういう部分から生まれてくるから、外国人参政権問題がすごく問題にはなるんでしょうね。それは、韓国との関係が元々はあるじゃないですか。その上にやはりそういう参政権を求めるとか、そういう主張が違うんじゃないかという。ちょっと筋が違うというか。そういう部分ですよ。そういう意味ですごい疑念があると思います。だからそういう問題に関心を寄せている部分はあります。

在日と韓国人、朝鮮人といったら今すごい同化してますよね。周りでも見てましたし。そういう意味でいったら、日本人にすごく近くなってると思うんです。中国人だって、これまで来てた層はやっぱりある程度、日本に意識があって、日本で勉強したりとか。そういうレベルでいったらそうなんですけど、やっぱりなぜブラジル人とか追い出そうと言わないのかといったら、すごい民団とかが政治的な主張してるから。そういうのを見て、保守界の人は、なんていうかすごい凶々しいと思っている部分があると思うんですよね。だから、日本で政治的な主張をする外国人といったら、基本的にそのどちらかに限られてくるじゃないですか。そういう部分に関して、保守の人たち、在特の人らはつぶさないかんとってると。多分そういうことなんでしょ。外国人いてもいいですけど、その人たちは例えば政治的な主張をしていくのは、それはどうなのかなみたいな。もちろんいいんですけど、程度問題でしょうね、やっぱり。

周りがよくいうのは、韓国併合して、それなりにオランダなんかには比べたらうまいことやったのに、何でこんなこといわれなきやいかんのか、そういう部分とリンクしてくるんじゃないかと思えますね。それをすごい最初思ったのがあって。韓国でそれなりにいいこともある程度はした。だからもうちょっと評価してもいいんじゃないか、そういう気持ちはあった。多分そこだったと思うんですよね、今考えたら。

10. 活動の持続

それ（活動し続ける理由）は確かに自分でも時々わからなくなるんですけど、どちらかというと早く冷めた方だと思うんですよ。だから、いつも思うのは、ネット見て在特会のデモ行ってという人は、燃え滾っているんですよね。燃え滾っている人は絶対続かないんですよ。確かに。僕も最初はそれくらいありましたけど、どちらかというともう離れて見てたというか。冷めて見るようになった。客観的に見るようになって。それが早かったのも、それは過ぎて。そこで別に行かなくなるというこ

とはなくて、なんだかんだお付き合いして。いろいろ手伝ったりして。在特会の活動というのは、すごい限定的じゃないですか。街宣やってデモやって集会やって。活動は、在特会は一部であって他にもいろいろ、ああこれは面白いなというのがあって。活動範囲が広がったです。そっちにすごい興味がありました。その一環で在特もやってみたいな。

正直自分でも不思議なんですけど、今までなんだかんだやってきたのかなというのは。それはあるんですけど、何なのかなあ。正直その問題は難しいです。答えにくいというか。なんだかんだで自分の中の一部、自分はそんなにいつも何かをやったりとか、主体的に動いてはいたんですけど、だからこそ続けてきたんかなという…。そういう立場だからこそできたかなと思います。

(活動してよかったのは)人間関係が広がったということ。もちろん運動の中ではありますけど、そこで幅広い層の人、そういう人と知り合いになれた。そういう人間関係の幅と。それとすごい人間観察ができましたね。いろんな人いるじゃないですか。そういう意味では本当に面白かったですね。あと議員とか、そういう人とかもある程度知り合いましたから。やっぱ人間関係ですかね。

(将来なりたいもの)今ねえ、ちょうどないんです。大学入ってから決めようなんて思って、とりあえず適当に大学に入って。もう2年たつんですけど。今だにわかりません。将来的には何かになってるのかな、とは思いますが、何かって聞かれたらそれはわかりません。「お前、4年後選挙に出ろ」とかいわれますけど、それは断ってるんですけど。もしかして何らかの形で議員秘書なり、活動とつながることはもしかしたらあるかもしれないけど、ないかもしれない。その時(次第)ですかね。

11. 結語に代えて

U氏は、インターナショナルスクールに通うという珍しい経歴を持ち、

それが排外主義運動への参加にも関係しているという。「ガイジンの学校」に通う中でアイデンティティを模索した結果、日本の文化や伝統、ひいては天皇を意識するようになった。それは中学生の時であり、排外主義運動に関わる以前のことだったから、インターナショナルスクールでの経験が影響したのは間違いないだろう。

ただし、彼がその際に情報源として依拠したのはインターネット上の情報であった。インターネットでの調べ物の習慣は、日本の公立小学校での総合学習の時間に身につけたものである。総合学習のカリキュラムで学んだ世代は、こうして歴史修正主義と接点を持つようになるわけで、U氏以外にも同様の経路で排外主義へと至った活動家がいた。学校で学ぶ「正史」たる歴史教科書の採択に際しては、相当のエネルギーを費やして修正主義的な教科書の採択阻止運動が展開される。だが、総合学習におけるインターネットの使い方については、その情報の質を判断するような教育がなされているとは考えにくい。ここでいうのは、イデオロギー的な観点からの是非ではない。実証上の根拠に乏しい修正主義的な情報がインターネットにあふれかえる現状に鑑みて、情報の質を判断できるような教育も必要になる。

活字メディアが支配的だった時代には、権威主義的ではあったものの編集・出版というフィルターを通していたため、最低限の「質の管理」は相対的にやりやすかった。インターネットでは、誰もが発信できるという民主化が進む一方で、情報の質を保証するものが何もないアナーキーな状況も作り出した。それが排外主義運動にとっての機会を作り出していることは間違いなく(樋口 2012f)、そこからネット社会のあり方を考える必要もあるだろう。

文献

樋口直人, 2012a, 「在特会の論理(1)~(7)」『徳島大学社会科学研究所』25号.

- , 2012b, 「在特会の論理(8)～(9)」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012c, 「『行動する保守』の論理(1)～(3)」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012d, 「在特会の論理(10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号.
- , 2012e, 「行動する保守の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45号.
- , 2012f, 「排外主義運動のマイクロ動員過程——なぜ在特会は動員に成功したのか」『アジア太平洋レビュー』9号.
- , 2012g, 「在特会の論理(11)～(14)」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012h, 「『行動する保守』の論理(5)～(6)」『徳島大学地域科学研究』2号.
- , 2012i, 「在特会の論理(15)～(18)」『徳島大学社会科学研究』26号.
- , 2013a, 「『行動する保守』の論理(7)」『アジア太平洋研究センター年報』9号.
- , 2013b, 「『行動する保守』の論理(8)」『茨城大学地域総合研究所年報』46号.
- , 2014, 『日本型排外主義』名古屋大学出版会.

(付記) 科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。